

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月9日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720183

研究課題名（和文） 近代コーカサス・フロンティア社会の形成—エニコロピアン家の活動を中心に—

研究課題名（英文） Making of a Caucasian Frontier Society in Modern times—Featuring the lives of Enikolopians “The Language Box”

研究代表者

前田 弘毅（MAEDA HIROTAKE）

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：90374701

研究成果の概要（和文）：

本研究ではトビリシ出身のアルメニア系グルジア士族エニコロピアン（「言葉の箱」）家の活動に注目した。家学である書記・多言語能力を活かし、マヌーチェフル・ハーン（イラン皇帝の側近宦官）、ミハイル・ロリス＝メリコフ（ロシア帝国内相）など、イラン・ロシア帝国双方の高官を輩出し、二カ国間関係でも活躍したが、同家の権力と政治基盤は19世紀コーカサス・フロンティア社会の到達点と限界を示していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study features the lives of Enikolopian family in 17-19th centuries. A Georgian noble of Armenian origin based in Tbilisi possessed a traditional skill of multi-lingual capacity and served Georgian kings as scribes and diplomats. In 19th century the family and their relatives produced such influential imperial elites like Manuchehr Khan Gorji (Qajar Iran) and Mikhail Loris-Melikov (Russian Empire). Their achievements and their ambivalent identities clearly reflect the regional features of the Caucasian frontier society between empires in the transitional period towards modern nation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：コーカサス、フロンティア、ガージャール朝イラン、ロシア帝国、ディアスポラ、通訳、グルジア、アルメニア

1. 研究開始当初の背景

本研究着想の背景として、主に以下の3点の研究動向・問題関心をあげることができる。

（1）歴史学において、境界を越えた人の移動や交流の諸相、人が動くことによって生じ

た制度的・社会的変容などに注目が集まりつつある。これは、国民国家システムとこの中で守られてきた国民国家史学が限界を迎えつつあることを示している。研究推進者は一貫してコーカサス出身者の「周辺世界」における「越境的」歴史的活動を明らかにする作

業に従事してきた。この中で、19世紀のイラン・ロシア関係で重要な役割を果たしながら、一国史の枠内で完全に忘れ去られているエニコロピアン一族について、ある程度基礎的な情報を集めるに至った。

(2) 上記のアクターの問題に対し、空間認識の問題に関しても、近年新たな研究動向が見られる。従来、「征服者」と「被征服者」の二分法で語られることの多かったフロンティア(境界領域)研究は、アメリカを中心に境界における多様性が注目され、むしろ異文化の出会いと混淆の場としての側面が強調されるようになった。T. Barrettの優れた著作など、その影響はロシア近代史にも及んでいる。こうした新たな研究動向を踏まえて、イラン・ロシア関係史やコーカサス地域史の視点からも同一族の活動の再検討が可能である。

(3) とりわけエニコロピアン一族の出身地トビリシは、中東に向かって開かれ、西のオデッサ、東のハルビンらと並ぶロシア帝国の代表的なフロンティア都市であり、境界を超えた影響力を持つ知識人が伝統的に活躍した場所である。同一族の活動を例にすることで、東洋学とロシア史研究など既存の枠組みに依拠した先行研究も利用しつつ、多面的かつ総合的に19世紀コーカサス現地社会の変容について探求することが可能である。また、境界域研究への関心の高まりを受けて、コーカサスに注目する若手研究者はアメリカを中心に増加しつつあり、活発な議論を通してコーカサス史や帝国論等について理論的に深めることも期待できる。

2. 研究の目的

上記の研究動向・問題関心を踏まえた上で、本研究課題は、トビリシ出身のアルメニア人家系エニコロピアン家の広範囲な歴史的活動を忠実に復元した上で、考察を加え、中東とロシアを結ぶ近代コーカサス・フロンティア社会の変容を明らかにすることを目的とした。現在、国民国家体制の矛盾が露呈する中、20世紀の歴史学が隠蔽してきた「境を越える」歴史研究に大きな注目が集まっている。本研究はコーカサス史、イラン史、ロシア史だけではなく、アルメニア・ディアスポラ研究や帝国とフロンティア関係史など中央ユーラシア研究にまつわる諸問題解明に有意義な成果をもたらすことが期待できる。帝国の支配エリートを輩出しながら、コーカサスという周縁の磁場を背負うという矛盾する

エリート家系に関する研究であり、より地域社会に密着した研究を行うことで、新たな近代コーカサス・フロンティア研究を切り開くものである。具体的な作業目的として以下の3点に注目した。

(1) この一族は17世紀からグルジア宮廷に仕え、イラン政権やオスマン朝との外交交渉における通訳として活躍した。しかし、その国境を跨いだネットワークは、ナショナリズムの勃興、国民国家システムの普及といった近代社会の中で次第に衰え、ロシア革命やイラン立憲革命などの政治変動の中で忘れ去られた。一族の活動は現在の歴史学ではほとんど知られておらず、系図作成などを通して家族関係の把握や活動の詳細等事実関係を探求する必要がある。この作業を通して、同家の広範な活動を確認する。

(2) エニコロピアン一族の活動を復元した上で、イランとロシア両帝国に仕えるに至った背景とその後の活動の詳細を明らかにすることで、外交史や両国の社会・経済史における一族の具体的な役割について探求する。こうした作業を通して、単なるディアスポラ史観やマイノリティの便宜的利用を強調する見方を超え、境を越えるネットワークを利用した幅広い活動の一方、19世紀において管理を強めていく国家のエリートを輩出するという、コーカサス出身者の有した背反する関係性の実態に迫る。

(3) エニコロピアン一族の概要、活動の詳細について検討した上で、彼らが活躍した二つの国家の関係史における役割や、出身地コーカサスおよびその中心都市トビリシにおけるその存在感と地域社会における役割について検討する。アルメニア商業ディアスポラの議論などと接続することで、既存の学説を批判的に継承し、国家史と地域史双方のレベルで同家の活動からみえるフロンティア都市としてのトビリシと境域地域としてのコーカサス社会の性格および、これに対する諸帝国の政策の特徴について具体的に探求する。

3. 研究の方法

上記の背景と目的を踏まえて、以下の3点の方法を用いて探求した。

(1) 家系の復元と活動の詳細について、グルジアをはじめとして一族の活動が見られる各国で史料調査を行い、史料の収集につと

めた。具体的にはグルジアの国立文書館や写本センター、アルメニアのマテナダランといった文書館における文献調査およびアメリカ、オーストリア、イランなどでの子孫への聞き取りも含めた資料収集を行った。さらに収集した資料について解析を進め、具体的に史実について明らかにすることを心がけた。

(2) 境界地域エリート of 歴史的活動やグルジア・アルメニア史学における扱い、ディアスポラ研究などについて関連文献の収集と読解を行うことで、研究の枠組みの深化につとめた。同様の目的で、研究推進者と同世代であり、ロシア語とトルコ語やアラビア語など複数言語を用いる点で手法も近いクリューズ(スタンフォード大学)やレイノルズ(プリンストン大学)といった海外の研究者と積極的な意見交換を行った。

(3) 国内外での学会における研究発表や論文執筆による研究成果の還元を積極的に行い、フィードバックからさらに新たな資料収集への糸口や理論的深化へのヒントを得るように努めた。

4. 研究成果

研究の成果等については以下のようにまとめることができる。

研究の主な成果としてははじめにあげることができるのは、主に海外調査を通じて、多数の未刊文書を収集することができた点である。トビリシの国立文書館では、エニコロピアン家出身官吏の記した公文書や、ロシアからイラン宮廷に派遣された同家官人が帝国権力から出発前に受けていた指令、ロシアからイランへ「逃亡した」農奴にまつわる訴えなど、国家レベル・地域レベルでの同家出身者のつながりと「分断」にまつわる興味深い文書史料を入手した。また、アルメニアのマテナダランが所蔵する文書からも、一族史に関連する様々な情報を得ることができた。

史料収集に関して、加えて特筆すべきは、子孫係累からもたらされた情報であり、トビリシでは 19 世紀前半にグルジア語で記された系譜やペルシア語文書の写し、ウィーンにおける調査では、20 世紀イラン史においてアーリア主義を声高に主張した有名軍人にもつながる興味深いペルシア語の系譜などを得た。ロシア帝国の文書なども含めて、グルジア語、ロシア語、ペルシア語の情報を利用して詳細な系図の復元が可能となった。

また、叙述史料についても、19 世紀末に記されたアルメニア語著作をグルジアの研究者の協力も得て読解し、改宗エリートも含めてイランにおけるエニコロピアン家出身者の活動について詳細情報を得た。この史料については、その重要性にも関わらず、今日言及されることがほとんどない。19 世紀においてアルメニア人知識人社会の一大拠点であったトビリシに関連する様々な史料に光をあげることができたことは大きな成果である。

さらに、グルジア語史料の中にも、19 世紀のみならず、18 世紀初頭についてエニコロピアン家のイラン宮廷との結びつきをうかがわせる興味深い記述を発見した。これは、研究推進者がこれまで行ってきた 19 世紀以前のイランにおけるコーカサス出身者の活動とも関連する興味深いデータである。

以上のように、コーカサスを出発地として、イラン・ロシア・ヨーロッパにまたがるエニコロピアン家の広がりについて、系譜情報の確定も含めて新たな知見を得た。そして、同一族の活動の解析から、身分制の動揺、地域秩序の再編、地域社会の変動など、ロシア支配下で、それまでの伝統的身分制社会から、民族原理が優先する新たな社会の秩序付けが進行しつつあった 19 世紀コーカサス・フロンティア社会における様々な興味深い事象を抽出することができた。

エニコロピアン家の活動の解析を通して得られた成果の国内外における位置づけとインパクトについても、順調に海外発表などを通して成果の浸透に努めた。

研究期間中、アメリカ(ミシガン大学、スタンフォード大学)、アルメニア(アルヤ大学)、イギリス(ロンドン大学)など国際学会を中心に発表を行った。また、イランとロシア間の境界等を移動したコーカサス出身者について東京や大阪で開催された国内の各種の講演会やセミナーで研究成果を披露したが、その際に得られたフィードバックも研究の進展に役立った。

公刊論文・図書としては以下のような成果を得た。分担も含めて、4 点の図書を執筆した。このほか、各国の研究者との意見交換も踏まえた上で、コーカサス地方の中東とロシアの間にある独特の地政学的条件について、周辺大国とコーカサス域内秩序の関係について、東洋文庫欧文紀要(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)に英文論文を投稿した。また、『歴史学研究』にグルジア武人のアフガニスタン・カンダハールから、イスタンブールまでのユーラシア大

陸をまたにかけたグルジア武人の活動を解析した論文を発表するなど、本研究を通して「越境」への観点を深めることができた。諸帝国のフロンティアが重なる地域としてのコーカサスの域内特性についても『ユーラシア研究』掲載の論文を著したが、エニコロピアン家の活動を検討する中で深めた地域へのまなざしについても、時間的・空間的に検討の幅を広げて成果を還元することができた。

ロシア帝国のもとで西欧化・世俗化したコーカサスのエリートは、「民族」言説が強まる中、帝国を解体する「周縁化」と分節化へつながる動きを自ら強めていった。その結果成立した 20 世紀の国民および民族史学が忘れ去った（ないし国民史学の枠組みで解釈してきた）彼らの活動を、コーカサス現地社会の近代への対応という大きな歴史的文脈の中で再評価することで、帝国史研究に新たな成果をもたらしたと考える。

以上のように、多数言語や各国に分散する史料収集に骨を折りつつ、入手・読解した範囲ですでにその社会的・政治的活動について多くの史実を明らかにすることができたと考えている。もっとも、同家の広汎かつ多彩な活動は、予想をはるかに上回るものであり、その複雑な活動の全貌をつかむため、今後も基礎的事実の発掘も含めて、様々な国家をまたいだその活動を追う必要がある。このほか、経済的基盤についてもより情報を集めることで、一族の生きた歴史社会の復元を進めていく。

ヨーロッパ、中東、ロシアの三つ巴の状況に、中央アジア・中国と、インド洋の要素がイランを経由して加わる複雑な地域がコーカサスであり、ユーラシア史の結節点として歴史学と地域研究の文字通りのフロンティアとして大きな可能性を秘めている。近代が切り捨ててきた「周縁性」の多様性に光を当てる作業を行うことで、国史に分割され細分化された「ナショナル」な歴史学に現在起こりつつあるパラダイム転換に大きく寄与し、既存の民族と国家を超える新たな歴史学を構築することができるであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Hirotake Maeda、Slave Elites Who Returned Home: Georgian *Vāli*-king Rostom and the Safavid Household Empire, *Memoirs of the Research Department of the Toyo*

Bunko, 査読有、69 巻、2011、97—127

② 前田弘毅、「境界」を突破するもの—サファヴィー朝に仕えたグルジア武人の活動から—、*歴史学研究*、査読有、881 号、2011、22—33

③ 前田弘毅、飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える、*ユーラシア研究*、査読有、41 号、2009、11—16

④ Hirotake Maeda、Parsadan Gorgijanidze's Exile in Shushtar: A Biographical Episode of a Georgian Official in the Service of the Safavids, *Studies on Persinate Societies*、査読有、1 巻 2 号、2008、218—229

〔学会発表〕（計 6 件）

① Hirotake Maeda、The Caucasian Slave Elites in the Iranian Empires, 1600–1900, Muslim Identities and Imperial Spaces: Networks, Mobility, and the Geopolitics of Empire and Nation (1700–2011)、2011 年 4 月 7 日、Stanford University

② 前田弘毅、「グルジア武人とサファヴィー朝権力」、九州史学会大会イスラム文明学会、2010 年 12 月 12 日、九州大学

③ Hirotake Maeda、An Armenian Family crossing Two Empires: the Enikolopian family between Iran and Russia in the nineteenth century、*Empires and Revolutions: Iranian-Russian Encounters since 1800*、2009 年 6 月 12 日、SOAS, University of London

④ 前田弘毅、よみがえるユーラシア—その光と影、飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える、ユーラシア研究所創立 20 周年記念シンポジウム、2009 年 4 月 18 日、立正大学

⑤ Hirotake Maeda、The Importance of Galust Shermazanian's Work for Iranian and Russian Relations and the Fate of Enikolopians in the 19th century, Iran and the Caucasus: Unity and Diversity、2008 年 6 月 6 日、Arya University

⑥ Hirotake Maeda、Identity in Aleksandre Orbeliani: Georgian Nationalism at the Earlier Stage and the Reality, Georgia: The Making of a National Culture、2008 年 5 月 16 日、The University of Michigan

〔図書〕（計 4 件）

① 前田弘毅編著、北海道大学出版会、多様性と可能性のコーカサス～民族紛争を超えて、2009、221

② 前田弘毅、明石書店、イスラーム世界の奴隷軍人とその実像—17 世紀サファヴィー朝イランとコーカサス、2009、402

③ 前田弘毅、東洋書店、グルジア現代史、2009、

④ Hirotake Maeda, “The Household of Allāhverdī Khān: An Example of Patronage Network in Safavid Iran”, in Florence Hellot-Bellier and Irène Natchkebia (eds.), *Géorgie et sa capitale Tbilissi entre Perse et Europe*, Paris-Tbilissi, l’Harmattan, March 2009, pp. 149-70

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 弘毅 (MAEDA HIROTAKE)

首都大学東京・大学院人文科学研究科・准教授

研究者番号 : 90374701